

闇夜の梅

三遊亭圓朝

鈴木行三校訂

青空文庫

工、講談の方の読物は、多く記録、其の他古書等、多少拠のあるものでござりますが、浄瑠璃や落語人情噺に至っては、作物が多いようござります。段々種を探つて見ると詰らぬもので、彼の浄瑠璃で名高いお染久松のごときも、実説では久松が十五、お染が三歳であつたというから、何うしても浮氣の出来よう道理がござりませぬ。久松が十五の時、主人の娘お染を桂川の辺で遊ばせて居る中に、つい過つてお染を川の中へ落したから御主人へ申訳がない、何うかして助けにやならぬと思つたものか、久松も続いて飛込むと、游泳を知らなかつたからついそれ切りとなつた。これを種にしてお染久松という質店の浄瑠璃が出来ましたものでござります。又大阪の今宮という処に心中があつた時に、或狂言作者が巧にこれを綴り、標題を何としたら宜かろうかと色々考えたが、何うしても工夫が附きませぬ、そこで三好松洛の許へ行つて、

「なんとこれ迄に拵えたが、外題を何とつけたらよかろう」

「いやお前のように、そんなに凝つちやアいけませぬ、寧そ手軽く『心中話たつた今宮』」

と仕たらようござりましょう」

「成程」

と直に右の通の外題にして演ると大層に当たったという話がある。その真似をして林家正藏という怪談師が、今戸に心中のあつた時に『たつた今戸心中噺』と標題を置き拵えた怪談が大して評が好かつたという事でございます。この闇夜の梅と題するお話は、戯作物などとは事違い、全く私が聞きました事実談でございます。

え、浅草に三筋町と申す所がある。是も縁で、三筋町があるから、其の側に三味線堀というのが有るなどは誠におかしい、それゆえ生駒というお邸があるんだなんぞは、後から拵えたものらしい。下谷があるから上野があつて、側に仲町がありまして上中下と揃つて居る。縁というものは何う考えても不思議なもので、腕尽にも金尽にも及ばぬものだというが、これは左様かも知れませぬ、まア呉服屋などで、不図地機の好いお値段も恰好な反物を見附けたから買おうと思つて懐中へ手を入れて見ると、金子が少々足りないから、一旦立ち帰り、金子の用意をして再び来ると、誠にお気の毒様でございますりますが、貴方がお帰りになると、直に入らしたお方を見せて呉れと仰しやいまして、到頭其の方の方へ縁附になりました。いやそれは残念な事をした、もうあゝいうのは

ありませぬか。へい、あれは二百反の中二反だけ別機べつばたであつたのですから、もう外ほかにはござりませぬ。それでは仕方がない、縁がなかつたのだらう。と諦めてしまふと、時経たつてから不意と田舎などから、自分が買いたいと思つた品とそっくりな反物を貰う事などがある。又お馴染なじみの芸者でも、生憎あいにく買おうと思つた晩外にお約束でもあれば逢う事は出来ませぬ。又金子かねを沢山懐ふところ中に入れて芝居を観ようと思つて行つても、爪も立たないほどの大入おおいりで、這入はいり所ところがなければ観る事は出来ませぬ。だから縁の無い事は金尽にも力尽にもいかぬもので、ましてや夫婦の縁などと来ては尚な更さら重い事で、人間の了簡りょうかんで自由に出来るものではござりませぬ。

え、浅草の三筋町——俗に棧さんまち町という所に、御維新ごいっしん前まで甲州屋と申す紙店かみやがござりました。主人あにぢは先年みまかりまして、お杉という後家が家督あとを踏まえて居おる。お嬢さんは今年十七になつて、名をお梅と云つて、近所では評判の別嬪べつびんでござります。番頭、手代、小僧、下女、下男等数多あまた召使めいしい、何暗からず立派に暮して居りました。すると子飼こがいから居おる衆くめのすけ之助のすけというもの、今では立派な手代となり、誠に優しい性うまれつき質しつで、其の上美うべ男なんでござります。嬢さんも最早妙齡としごろゆえ、良い智むこがあつたらば取りたいものと、お母つかさんは大事がつて少しも側を離さないようにして置きました。が、どうも仕方がないので、

ある晩のことお母さんが不図目を覚まして見ると娘が居ない。

「はてな、何処へ行ったか知らん、手水に行つたならもう帰りそうなものだが」
と思つたが何時まで経つても戻つて来ない。

母「はてな嬢ももう年頃、外に何も苦勞になる事はないが、店の手代の糸之助は子飼からの馴染ゆえ大層仲が好いようだが、事によつたら深い鼻肩にでもしていはせぬか知ら」
とお母さんが始めて気が付いたけれども、気の付きようが遅かつたから、もう間に合ひませぬ。これが馬鹿のお母さんなら直に起き上つて紙燭でも点し、からく方々を開け散かして、「此の娘は何うしたんだよ」なんて呶鳴つて騒ぐんだが、沈着いた方だから其様な蓮葉な真似はしない、いきなり長羅宇の煙管で灰吹をポンくと叩いた。深夜のとゆえピーンと響いたから、お嬢さんは恟りいたし、そつと拔足をして便所へ参り、ギー、ボタンと便所から出たような音ばかりさせて、ポチャくくくと水をかけて手を洗い、何喰わぬ顔をして其の晩は寝てしまった。翌朝になると、お母さんが直に鳶頭を呼びにやつて、右の話をいたし、一時糸之助の暇を取つて貰いたいと云う。鳶頭も承知をして立帰つた後で、

主婦「糸や、糸」

糸「へい」

主婦「あのお前のう、ちよいと鳥越とりこえの鳶頭とんぼの処まで行つてくんな、用は行きさえすれば解る………私がそういつたから来ましたといえれば解るんだよ」

糸「へい畏りました」

何だか理由わけは解らぬが、糸之助は直に抱かかの鳶頭とんぼの処へやつて来まして、

糸「へい今日は」

鳶「いや、お上あがんなさい、宜いいからまアお上あがんなさい、ずうつと二階へ、梯子はしごが危あやのうがすよ、おいお民たみ、糸どんに上げるんだから好いい茶を入れなよ、なに、何か茶うけがあるだろう、羊羹ようかんがあつた筈だ、あれを切きんなよ、チョツ不精ふせいな奴やつだな、折おりの蓋ふたの上で切れるもんか、粗まな板いたを持もつて来なくつちやアいかねえ、厚く切きんなよ、薄うすつぺらに切ると旨うまいくねえから、己おれが持もつて来こいてつたら直ただに持もつて来こな、宜いいか、話まの真最中まっさいちゆうはんなまな時分に持もつて来こちやアいけねえぜ」

トンくくと梯子はしごを上あがつて、

鳶「へ、今日は」

糸「何なにんだかね鳶頭とんぼ、お内儀かみさんが、鳶頭とんぼの処ゆへ行きさえすれば解るから、行ゆつて来こい

と仰しやいましたから参りました」

鳶「それは何うもお忙がしい処をお呼び立て申して済みませぬね、糸どん実は斯ういう話だ、今朝ねお内儀さんから私へお人だ、何だろうと思つて直に出掛けてつてお目にかゝると、奥の六畳へ通して長々と昔噺が始まつたんだ、鳶頭お前がまだ年の行かねえ時分から当家へ出入をするねと仰しやるから、左様でござえます、長え間色々お世話になりますんで、なに其様な事は何うでも宜いが、旦那が死んで今年で四年になるし、私も段々年を取るし、お梅ももう十七になる、来年は歳廻りが良いから何様な者でも髻を取つたらよろうと話をする、いつでも娘が厭がる、他人様から、斯ういう良い髻がありますと申込んで厭がるもんだから、他人が色々な事を云つて困る、妙齡の娘が髻を取るのを厭がるには、何か理由があるんだらう、なにそれは店の手代に糸之助という好い男があるから事に依つたらあの好い男と仔細でもありはしないか、と云いもしまいが、ひよつとして其様なことを云われた日には、世間の口にやア戸が閉てられねえ、ねえ鳶頭、と斯うお内儀さんがいうのだ、してみると何かお前さんとお嬢さまとあやしい情交にでもなつていうに私の耳には聞えるんだ、宜うがすかい、それから、誠に何うもそれは御心配なことでという、お内儀さんの仰しやるには、糸之助も小さい時分から長く勤めて居たから、能

く気心も知れて居るが、何分今直すぐに何う斯どうという訳にも往ゆかず、捨て置いて失策しくじりでも
 出来るといけねえから、一と先まず谷中やなかの兄あにさんの方へ連れて行つて、時節を待つたら宜か
 ろう、其の中うちにはまた出入をさせる事もあるじやアねえか、と斯う仰しやるのだ、うむ、
 それから、なんだ斯ういう事も云つた、何分宅うちの奉公人や何かの口がうるせえから、一時
 そういう事にするんだが、仮令たとえ他人ひとが何なんといおうと、私の為にはたった一人の娘だから、
 同じ取るなら娘の氣に入つた聳を取つて、初ういま孫まごの顔を見たいと云うのが親の情じやう合あい
 やアねえか、娘が強たつて彼あれでなければならぬといえば、私には氣に入らんでも、娘の好
 いた聳を取つて其の若夫婦に私は死し水を取つて貰みう氣だが、鳶頭何うだろう、と仰しや
 るのだ、お内儀さんの思おぼ召めしでは、一時お前まえさんに暇を出して、世間でぐずぐずいわね
 えようにしちまつて、それから良い里を拵まえて、ずうつと表向きお前まえさんを聳まにして、死
 水を取つて貰みおうてえお心持があるんだから、糸いとどん早はやまつちやアいけねえよ、宜いうがす
 か、お内儀さんには、色々深ふえ思召しめしがあるんだから、私わたしも大旦那のお若わえ時分とき、まだ糸いとび
 鬢ん奴やつこの時分から、甲州屋のお店へ出入りをしてえて、お前まえさんとも古い馴染だが、今
 度来やアがった番頭ね、彼奴あいつが悪い奴なんだ、いろく胡麻ごまを摺すりやアがって仕様がねえ
 からお内儀さんも心配をしていらつしやるんだが、ねえ糸いとどん」

糸「へエ、承知いたしました」

鳶「でね、何にもいわず、少し兄の方に用事が出来ましたからお暇を願います、長々御厄介になりました、と斯ういつて廉をいわずにお暇を取つちまう方が好い、いろいろどくしく詫なんぞを仕ちやア可けねえよ」

糸「へエ、畏りました、何うも誠に面目次第もござりませぬ」

とおろく泣きながら、糸之助が帰りまして、

糸「へエ、只今」

内儀「あい糸か、此方へお這入り、好いよ遠慮をしないで……先刻、鳶頭が来たから四方山の話をして置いたが、何うだい能くお前の胸に落ち入ったかい、何も是れという越度の無いお前に暇を出すといったら、如何にも酷い主人のようにお思いかも知らないが、これはお前の為だよ、お前も小さい時分にいたから、何だか私も子のような心持がして誠に可愛く思うが、何分世間の口が面倒だから暇を出すのだけでも、又縁があれば一旦主従となつたのも、出入の出来ないことは無いから、まあく気を長く、兄さんの処におとなしくしているが好い、軽はずみな心を出して、こんな淋しいお寺なんぞにいられるものかつて、ふいと何処かへ姿を隠すような事でもあられると、どんなに案じられる

か知れないから、ようく心を落着けて時節を待つて、呉れなくちやア私が困るよ」

糸「へエ、有難うございます、誠に何うも面目次第もございませぬ」

内儀「さ、早く行くが好い、何時までも此処こゝにいると面倒だから、谷中のお寺へ行つたら能く兄さんのいう事を聴いて、身体を大事にして時節の来るのを待つていなよ」

糸「へエ有難う存じます」

と袂たもとから手拭てぬぐいを取り出し、涙を拭いながら店へ出て来ると、番頭は糸之助が暇いとまになつて好い気味だと喜んで居る。

糸「えゝ、番頭さん、私は唯今いとまお暇いとまになりましたして谷中の兄の方へ参りますから、何分お店の事をよろしく願います」

番頭「左様じゃげな、根ねから些ちつとも知らんかったが、何う云う理由わけで糸之助がお暇いとまになりますかと云うて、私わしも色々言葉を尽してお詫をしたが、なか／＼お聴き容いれがない、お前方まへが知つた事ことぢやない、此様こゝに云われるで何うにも仕ようがないじやて、併しかし何うも気の毒こつな事ことぢやな、根ねから、全体商あきんど人はお前の性分に合あわぬのじやから、却かえつて谷中のお寺へ行ゆきなはつた方が心が沈おちつ着いて宜いいやろう」

糸「へエ有難う、何うも長々お世話さまでございました、お店の方も段々忙しくなりま

すから、人が殖えなければならぬ処を少なくなるんですから、何分宜しくお頼み申します、あの定吉さだきちどんは何処かへ行きましたか」

番頭「いや今其処そこに居ったツけ、定吉イ定吉」

定「おや衆どん、今お前さんを探しに表へ出ましたが、貴方はお暇になりましたてえから、何ういう理由わけだろうと聞いても解らないんですが、本当に何うもお気の毒さまで」

衆「お前と私とは別段仲が好かつたから、お前に別れるのは誠に辛いけれども、拗よんどころない事があつてお暇になつたのだが、私が居なくなると番頭さんに無理な小言をいわれても、誰も詫びてくれるものがないから、お前も能く気を付けて叱られないように御奉公を大事にするんだよ」

定「へエ有難う、お前さんが下るくらいなら私も下つた方がようございます、幾ら私がいる気でも、外の者は、みんな意地が悪くつて居られませぬもの、其そ中でも、新次郎しんじろうどんなどは、しんねりむつりの嫌な人で、私が寝てえると焼芋の皮なんぞを態わざと置いて、そうしてお内儀さんが朝暖簾のれんの処から顔を出して、さ、皆みんな起きなよと仰しやる時に新どんの意地悪が、あの昨晩定吉が寝ながら焼芋を食べましたなんて嘘ばかり吐ついて人を叱ちらせるんですもの、そうすると番頭さんが私の尻しつを捲まくつて、定規板でピシヤ〜なぐ撲なぐるんですも

の、痛くて堪りやアしませんや、此間も宿下りの時お母さんにそういったんです、お内儀さんもお嬢さんも糸どんも皆善い方だけれども、ほかの者は残らず意地が悪くって辛抱が出来なくてえと、そんな事をいうものじゃアない、それが身の修行だから、我慢をしなくっちゃアいけないと云われますから、糸どんがおいでなさる間は辛抱が出来る、糸どんは大層私を可愛がつておくんすつて、何かおいしい物があると、お蔵の棚へ内証で取つておくんすつて、ちよいと出し物があるから蔵まで一緒に行っておくれつて連れてつて、さ、お食べてカステラ巻だの何だのを食べさせて下すつたり、お小遣をおくんすつたりして、本当に優しくして下さるよと然ういったら、母親が涙ぐんで、あゝ有難いことだ、そういうお方が在らっしゃるのはお前が奉公の出来る瑞相だから、何でもその方をしくじらないように為なくっちゃア可けない、その方の御機嫌を損ねるとお店にはいられないから、どんな無理なことを仰しやつてもいう事を聴くんだよといました」

糸「早く彼方へお出で、何時までも此処にいと又叱られるから」

定「へエ、今行きます」

糸「清助どんは何うしたえ」

定「今物置に薪を積直して居ましたつけ」

糸「ちよいと清助どんにも暇乞をして行こう」

定「じゃア私も一緒に行きましよう」

糸「清助どん、何うも長々お世話になりました」

清「お、糸どんか、今ね己が聞いたんだ、おさきどんがの話に、今日急に糸どんがお暇になつたてえから、己ハアほんとうに魂消ただ、何でもこれは番頭野郎の策略に違えねえ、彼奴は厭に意地が悪くつて、何かお前様を追出させるように巧んだに違え無えだ、本当にあのくれえ憎らしい野郎も無えもんだ、ちよいと何一つくれるんでもお前さんと番頭とはこう違うだ、こんな物は己ア嫌えだ、お前も嫌えかも知れねえが喰うなら喰つてくろ、勿体ねえからつてお前さんは旨え物をくれるだが、番頭野郎は自分がそれ程に好かねえもんでも惜しがつてくれやアがるだ、此間も他処から法事の饅頭が来た時、お店へも出ると彼奴は酒呑だから甘え物は嫌えだろう、それだのにさ、清助汝がに饅頭をくれてやる、田舎者だから此様な結構な物は食つたことは有るめえ、汝がのような奴に惜しいもんだけれど、汝がに食わすと、斯う吐しやがるだ、己も余り腹が立ったから、何うかして意趣返しをしてやろうと思つて、此間鹿角菜と油揚のお菜の時に、お椀の中へそつと草鞋

虫を入れて食わせてやっただ、そんな事は何うでも好いが、お前さんがお暇になるなら何んにも楽しみが無えから己も下ろうか知ら、下らば直に故郷へ帰るだよ、己は信州飯山の在でござえますから、めつたに来る事もあるめえが、善光寺へ参詣にでも来る事が有つたら是非寄つて下せえまし、田舎の事だから、何も外に御馳走の仕ようが無えから、鹿でも打つて御馳走しべいから、何だか馴染の人に別れるのは辛えもんだね、何うかまア成るだけ煩らわねえように氣い付けて、好いかね」

糸「有難う」

娘のお梅に逢いたいのは山々だが、お内儀さんのお言葉添えもあるから、その儘暇を取つて、これから谷中の長安寺へ参り、いまに好い便りがあるだろうと待つて居りました。此方はお梅、あれきり何の便りもないが、もしや糸之助の了簡が変りはしないかと、娘心にいろくと思ひ計り、耐え兼ねたものか、ある夜二歩金で五十両ほどを盗み出して懐中いたし、お高祖頭巾を被り、庭下駄を履いたなりで家を抜け出し、上野の三橋の側まで来ると、夜明しの茶飯屋が出ていたから、お梅はそれへ来て、

梅「御免なさいまし」

爺「へエおいでなさいまし、此方へお掛けなさいまして」

梅「はい、あの谷中の方へは何う参つたら宜しゅうございましょう」

爺「え、谷中は何方までお出でなさるんですい」

梅「あの長安寺と申す寺でございませぬがね」

爺「え、*仰願寺をくれろと仰しやるんですか、えへ、仰願寺なら蠟燭屋へお出な
さらないじやアございませぬよ」

*「小さき一種のろうそく江戸山谷の仰願寺にて用いはじめしより云う」

梅「いえあのお寺でございませぬがね」

爺「何ですいお螻の虫ですと」

梅「い、え長安寺というお寺へ参るのでございませぬが」

すると小暗い所にいた一人の男が口を出して、

男「え、もし、お嬢さん、その長安寺というのは私が能く知つてますよ」

と云いながらずつと出た男の姿を見ると、紋羽の綿頭巾を被り、裾短な筒袖を着
し、白木の二重廻りの三尺を締め、盲縞の股引腹掛と云う風体。

男「まあ御免なさい、私アこんな形姿をしてえますが、その長安寺の門番でげす」

梅「おや、それじやア貴方にお聞きをしたら分りましようが、あの糸之助はやつぱ

り和尚様のお側に居りますか」

男「えゝ、糸之助さんは、おいででござえます、あなたは何ぞ御用でもあるんですか」
 梅「はい、あの、糸之助は私どもに長らく勤めて居ったものですが、少し理由がありまして先達暇を出しましたが、それきり何の沙汰もございませんで、余り案じられますから出て参りましたのでございます」

男「へエー左様でございますか、じゃアまあ私と一緒においでなさい、どうせ彼方へ歸るんですからお連れ申しましょう、其の代りお嬢様に少しお願えがあるんです、毎度私は和尚様から殺生をしてはならねえぞとやかましく云われるんですが、嗜な道は止められず、毎晩斯うやつて、*どんどんへ来ては鰻の穴釣をやってるんですが、どうぞお嬢さま私が此処で釣をした事は和尚様に黙つて、おくんなさい」

*「三橋の側にあつた不忍池の水の落口」

梅「御不都合の事なら決して申しは致しませぬ」

男「おい老爺さん」

爺「へい」

男「あのね、此のお嬢様は己の方へ来るお方だから、己が御案内をして行くんだ、さ、

喰つた代を此処へ置くぜ」

爺「あなた、これは一分銀で、お釣はござりませぬが」

男「なに釣は要らねえ、お前にやつちまわア」

爺「それは何うも有難う存じます、左様なら夜が更けて居りますから、お気を付けあそばして」

男「なに大丈夫だ、己が附いてるから」

と怪しの男がお梅を連れて、不忍弁天の池の辺までかゝつて参りました。

二

え、引続のお梅糸之助のお話。何ういう理由か女子の名を先に云つて男子の名を後で呼ぶ。お花半七とか、お染久松とか、夕霧伊左衛門とかいうような訳で、実に可笑しいものでござります。さて日本も嘉永の五年あたりは、まだ世の中が開けませぬから、神信心に凝るとか、易占に見て貰うとかいうような人が多かつたものでござります。丁度嘉永の六年に亜米利加船が日本へ渡来をいたしてから、諸藩共に鎖国攘夷などという事

を称え出し、そろ／＼ごたつきはじめましたが、町家では些とも気が附かずに居ったこととでござります。

彼の浅草三筋町の甲州屋の娘お梅が、糸之助の後を慕つて家出をいたす。何程年が行かぬとは申しながら、実に無分別極まった訳でござります。左様な事とは毫しも知らぬ糸之助が、丁度お梅が家出をした其の翌朝のこと、兄の玄道が谷中の青雲寺まで法要があつて出かけた留守、竹箒を持つて頻りに庭を掃いていると、表からずつと這入つて来た男は年頃三十二三ぐらいで、色の浅黒い鼻筋の通つたちよつと青髯の生えた、口許の締つた、利口そうな顔附をして居ますけれども、形姿を見ると極不粹な拵で、艾草縞の単衣に紺の一本独鈷の帯を締め、にこ／＼笑いながら、

男「え、御免なさいまし」

糸「はい、お出でなさい」

男「え、長安寺というのは此方ですか」

糸「へエ、左様でございます」

男「あの此方に糸之助さんというお方がおいででござりますか」

糸「へエ、糸之助は私でございますが…」

男「ア左様でげすか、是は何うも…左様ならちよいと表まで顔を貸してお貰い申したいもので」

糸「へエ……あの生憎兄が居ませぬで、何うも家を空にして出る訳には参りませぬから、若し何ぞ御用がおあんなさるなら庫裏の方へお上んなすつて」

男「左様でげすか、じやア御免なせえまし」

糸「さ、何卒此方へ」

男「へい」

紺足袋の塵埃を払つて上へ昇る。糸之助は渋茶と共に有合の乾菓子か何かをそれへ出す。

男「いえ、もうお構いなせえますな、へい有難う、え、貴方にはお初にお目にかゝりますが、私は千駄木の植木屋九兵衛という者でございまして」

糸「へえへえ」

九「実了其の、昨夜、お嬢様が突然に私ん処へおいでなすつたんで」

糸「え、嬢さんと仰しやるのは……」

九「へえ鳥越棧町の甲州屋のお嬢さんで」

糸「へえー、何ういう理由で貴方の処へお嬢様が……」

九「いや、これは解りますめえ、斯ういう理由なんでげす、あのお嬢さんが二歳の時に、私の母親がお乳を上げたんで、まア外に誰も相談相手が無いからつて、訪ねておいでなすつたから、母親もびつくりして、まアお嬢さん、今時分何ういう理由で入らしたてえと、犬に吠えられたり何かして、命からがら漸うの事でお前の処へ来た理由は、誠に乳母や面目ないが、長らく宅に勤めて居た手代の糸之助というものと、人知れず懇を通じて夫婦約束をした、処がお母さんが世間の口がうるさいから一時斯うはするもの、後には必ず添わせてやると仰しやつて、糸之助に暇を出して了つた後で、外から聳を取れと仰しやる、それじゃアどうも糸之助に義理が済まないから、私は斯うやつて駈出したんだと仰しやるんです、そうすると私の母親は胆をつぶしてね、素ツ堅気だから、なか／＼合点しねえ、それはお嬢様飛んでもない事で、お店の奉公人や何かと私通をするようなお嬢様なら、私の処へは置きませぬ、只つた今出てお出なせえというから、私が仲裁をして、まアお母ア待ちねえ、そうお前のように頑固なことばかりいっちゃアしようがねえ、折角頼りに思つておいでなすつたお前まで、そんな邪険な事を云つたら娘心の一筋に思い詰め、此家から又駈出して途中散途で、何様な軽はずみな心を出して、間違えがねえとも限らね

え、まあ〜己のいう通りにして居ねえといつて、それからお嬢様を此方へ呼んでお母はあんな事を云いますが、お前さんは何処までも糸之助様と添いたいという了簡があるなれば、私がまあ何うにでもしてお世話を致しましょう、貴方はお宅を勸当されても、糸之助様と添遂げるといふ程の御決心がありますかてえと、屹度遂げます、一旦糸之助も私と夫婦約束をしたのですもの、確かに私を見捨てないという事もいいましたし、又そんな不実な人ではありませぬ、じやア宜うがすが、何処か行く所がありますかと云うと、何処も目的がねえ、こう云うから私も困つて、兎も角糸さんに逢つてからの事に仕ましようといつて、今日わざわざお前さんの所へ訪ねて来たんですが、お前さんも矢つ張お嬢様と何処までも添い遂げるといふ御了簡があるんですか、ないんですか、一応貴方の胸を聴きに来たんでげす」

糸「それは何うも怪しからぬ事です、あの時お内儀様が色々と御真実に仰しやつて下さったから、私は斯うやつて何処へも行かずに辛抱をして居ますのに、お嬢様に聲を取れと仰しやるような、そんな御了簡違ひのお方なら、私は何処までもお嬢様を連れて逃げまして、何様な真似をしたつて屹度添い遂げます」

九「それで私も安心をしたが、お前さん何処か知ってる所がありますか」

糸「私は別に懇意な家もありませぬ」

九「そりやア困るね、何所かありませぬか」

糸「へエ、何も」

九「何も無いたつて困るねえ、じやア斯うしよう、下総の都賀崎と云う所に金藏という者がある、私とは少し親類合の者だから、これへ手紙を附けて上げるから、当人に逢つて、能く相談をして世帯を持たせて貰いなさるが宜い、併し彼方へ行くだけの路銀と世帯を持つだけの用意はありやすか」

糸「金と云つては別にございませぬが、兄が此間私にしまつて置けと預けた金がございませぬ、それは本堂再建のため、世話人衆のお骨折で、八十両程集りましたのでございませぬ」

九「イヤ八十両ありやア結構だ、三十両一ト資本と云うが、何様な事をしても五十両なければ十分てえ訳には往かねえが、其の上に尚三十両も余計な資金があれば、立派にそれで取附けますが、其の金をお前様取れますか」

糸「へえ、用筆筒の抽斗に這入つていますから直に取れます、そうして後にお宅へ出ますが何方です」

九「あの千駄木へお出でなさると右側に下駄屋があります、それへ附いて広い横町を右へ曲ると棚村たなむらというお坊主の別荘がある、其のうしろへ往つて植木屋の九兵衛といえは直じきに知れます」

糸「じゃア、今晚兄が帰つたら直すくに出ます」

九「今晚といつてもなるたけ早い方が宜ようがすよ」

糸「へエ日暮までにはどんな事をしても屹度きつと参ります」

九「じゃア其の積つもりで何分お頼み申します」

糸「ハイ宜しゅうございます」

九「左様なら」

パイと表へ出て了しまう。其の跡で糸之助が、無分別にも不図ふと悪心を起し、己おのれが預りの金子八十両を窃ぬすみ出し、此方こなたへ出て見ると今の男が証拠かねに置いて行つたものか、予かて見覚えあるお梅の金巾かねぎんちやく着そこが其処ほうに抛り出してあつた、取上げて見ると中に金子が三両ばかり這入いつている。

糸「はてな、是はあの人こが置いて行つたのか知ら、ア、そうく、これを置いて行くか
らは此こん中へ八十両の金子かねを入れて来いという謎かも知れない」

と右の*女めおとぎん夫ちやく巾着の中へ金子かねを入れ、確しつかり懐なごに仕舞まつて、そろ／＼出いかけようかと思おもつている処へ兄あにの玄道げんどうが帰かえつて参まゐり、それより入い替かり立た代しろり客きやくが来るので、何なに分ぶん出いる事ことが出来できませぬ。

*「せなかあわせにくつついている巾着」

お話は二つに分われまして鳥越とりご棧せん町の甲州屋方では大騒おほさわぎ、昨夜ゆうべ娘のお梅おむねが家出いをいたした切きりかいくれ行方ゆきかたが解とりませぬから、家内中うちじゆうの心配しんぱい大方おほほうならず、お鬪むくじを取るやら、トう籠らなに占みてもらうやら、大變おほな騒さわぎをして居ゐる処へ、不ふ忍にん弁べん天てんの池いけに、十六七じゅうしちの娘むすめの死し体たいが打う込んであるという噂うわさを聞き込んで来て、知しらせた者ものがあるから、母おふくろ親おやは仰おほ天てんして取るものも取とりあえず来きて見みると、お梅おむねに相違さむいないから早々はやはや人を以もつて御檢視ごけんしを願ねがい、段々だんだん死し体たいを調しらべて見みると、縊くびり殺ころして池の中へ投なげ込んだものらしく、殊ことには持も出した五十両ごじゅうりょうの金子きんすが懐なごにないから、おおかた物もの取とりであろうと、事ことが極ごくつて検視けんし済すの上うへ死骸しがいを引ひ取り、漸ようやく日ひ暮方くれがたに死骸しがいを棺桶くわんぼくへ収おさめることになつた。処ところへ鳶頭かしろが来きまして、

鳶「へ工くわ唯今ただいま、あの何なんでげす、八丁堀はちぢょうぼりさんと、それから一番遠いちばんとほいのが麻布あさふの御親類ごしんるいでげすが、それ／＼皆みな子分こぶんを出いしてお知らせ申ましました」

番頭「あ、それはどうも大きおほきに御苦勞ごくろう／＼」

鳶「何だなア、定さん、男の癖におい／＼泣くのは止しねえ、お内儀様は女でこそあれ、あゝいう御気象だから、涙一滴滲さぬで我慢をしていらつしやるのだ、それだのにお前が早桶の側へ行つて、おい／＼泣くもんだから不可えよ」

定「泣くなつてそれは無理でございませう、何だか此の早桶の側へ来ると哀しくなるんですもの、お嬢様は別段に可愛がつて呉れましたから、私は哀しくなるのです」

鳶「まア泣いちやア不可ねえ、えゝお内儀様唯今」

内儀「あい、鳶頭大きに色々お骨折で、何も彼もお前のお蔭で行届きました」

鳶「どう致しまして、就きまして麻布様の方へお嬢様が家出をなすつた事を知らせにやりまして、金太がようやく先方へ着いたくらいの時に、又斯ういう変事が出来ましたから、追かけて人を出し、これ／＼でおなくなりになつたてえ事をお知らせ申しましたら、大層にお驚きなすつたそうだけです」

内儀「そうであつたらう、もう麻布のが一番彼を可愛がつてくれたから、誠に有難う、万事お前のお蔭で行届きました、が斯うなるのも皆な因縁事と諦めて居ますから、私は哀しくも何ともありませんよ」

鳶「いえ、何うも御気象な事で、まアどうもお嬢様がお小さい時分、確か七歳のお祝の

時、私が^{わつし}お供を致しまして、鎮守様から浅草の観音様へ参^{めえ}りましたが、いまだに能く覚え
ております、往來の者が皆^{みんな}振返つて見て、まアどうも玉子を剥^むいたような綺麗なお嬢^{さん}様だ、
可愛らしいお児^こだつて誰でも誉めねえものは無^ねえくれえでげしたが、幼^{ちい}少^{さい}せい時分からの
お馴染ゆえ、此の頃になつてお嬢^{さん}様が傲慢なことを仰しやいまして、あなた其^{そん}様な事を
いったつていけませぬ、わたしの膝の上で小便をした事がありますぜと、あら鳶頭幼
少せい時分の事をいつちやア厭だよなんて、真^{まっか}紅におなりでしたが、何とも申そうようは
ござえませぬ」

内儀「はい、お前も久しい馴染ゆえお線香でも上げてやっておくれ」

鳶「へえ、有難う……え、番頭さん、誠に何うも飛んでもねえ事で」

番頭「いや鳶頭大きに御苦労であつた、まア此^{こつち}方へ来なさい、何うもお内儀^{おぼし}さんの思^し
召^{めし}を考えて見るとお氣の毒で何うもならぬ、ならぬが当^{うち}家のお嬢^{さん}様を殺したのは誰じや
という事は大概お前も感付いておるじやろうな」

鳶「いゝえ、些^{ちつ}とも知りやせぬよ、何だか物取だろつてえ評判なんで」

番「いゝや物取ではない、何でも是は糸之助の仕^{しわざ}業に相違ないという私^{わたがえ}の考だ」

鳶「ハ、飛んでもねえ事をいいますね、其^{そん}様なお前^{めえ}さん……ナなんぼ糸どんが憎いたつ

て、無暗に人殺に落ちたりなんかして、どうしてお前さん衆どんは其様な悪い事をする
ような人じゃアねえ」

番「いやそれはいかぬ、お内儀はん斯ういう最中で争論をしては済みまへんが、一寸これに就いておはなしがあるんでおす、一昨夜私が一寸用場へ参りまして用を達してから、手を洗うていると、ほんのりと星光で人影が見えるで、はてナと思うて斯う透して見ておると、垣根の外へ廻つて来たのが衆之助でおす、するとお嬢様がこつちやから声を掛けて衆之助やないかというと、はい私でございまして低声でいいましたわい、まあ衆之助よう来ておくれた、はい漸うの事で忍んで参りました、お前に逢いとうて逢いとうてどうもならぬであつた、私も逢いとうてならぬから、漸うの思いで参りました、私もそう長う寺に辛抱しては居られまへぬ、あんたはんも私のような者でも本当に思うて下はるなら、寧ろ手に手を取つて此所を逃げまひよう、そうしてあんたと二人で夫婦になつて、深山の奥なりと行んで暮したいが、それに就いても切て金子の五六十両も持つてお出でやというと、おゝ左様か、そんなら屹度明日の晩持つて行ぬという事を確かに聞いた」

鳶「へえ、それから」

番「どうも変やと思つていると、あんたお嬢様が莫大のお金を持つて逃げやはつた、そ

れ故何うも私の思うには糸之助がお嬢様を殺して金子を取って、其の死骸を池中へ投入込んだに違いないと斯う考えるのでおす」

鳶「おう、おう番頭さん、詰らねえ事を云つちやアいけねえぜ、お前は全体糸どんを憎むから然う思うんだが、まアよく考えて見ねえ、糸どんが人殺をするような人だか何だか、ソ、其様な解らねえ事をいつたつて仕様がねえじゃアねえか」

番「イヤ真実の事だ、証拠があるぜ」

鳶「証、な何が証拠だ」

番「定吉い、ちよつと此処へ来い、えゝめろゝ泣くな」

定「何です番頭さん、泣くなたつてお嬢様が死んで哀しくつて堪らないから、泣くんです」

番「えゝい、汝がお嬢様を殺したもおんなじ事だ」

定「あゝいう無理な事ばかりいうんだもの、どういう理由で」

番「汝は一昨日の夜この店で帯を締め直す時に落した手紙は、お嬢様に頼まれて糸之助の処へ届けようとしたのじゃないか」

定「あら………仕様がないな、彼所に持っているのだもの、道理で無いと思つた」

番「此様なものをお嬢様から頼まれるのが悪いのだ」

定「頼まれるのが悪いたって……仕様がないな……その頼まれたのはなんでござい
ます……仕様がないな……あの……それはお嬢様が、定や、ちよいとお出でてえから、
はいてつてお居間へ行つたんです、然うするとお前何所へ行くんだと仰しやるから、私は
谷中の方へ参るんですといったら、そんならお前これを糸どんに届けてお呉れつて、お手
紙を私の懐へ入れたから持つて行つたんです」

番「ウム、持つて行つて何うした」

定「何うしたつて……しようがないな」

番「汝は度々糸之助の処へ寄るから悪いのじゃ」

定「ナニ寄る気でもないんですが、近いから、あのお寺の前を通ると曲角のお寺だ
もんですから、よく門の所なんぞを箒いて、久振だ、お寄りなてえから、ハイてん
で旧は朋輩だから寄りますね」

番「道理で毎も使が長いのや」

定「ナニ別に長い訳もないんですが、今お葬式が来てお饅頭を貰った、それをお前に
上げるから、お待ちてえから待つてたんです」

番「えゝい、喰い物の事ばかり云うて居る。汝が取次をするから此の様な間違が出来たのや、サ是を御覧、此の手紙が何よりの証拠や、私はお前に逢いとうて逢いとうてならぬから、家出をしてお前の処へ行く、何卒末長く見捨てずに置いておくれと書いてあるやないか、是が何よりの証拠や」

鳶「証拠だツて、そんな事は私ア知りやアしねえ」

番「知りやせぬと云うてまアよく考えて見なはれ、当家のお内儀様はこないに諦めの宜えお方やから、涙一滴濡さぬが、鳶頭が仲へ這入つて口を利き、もう甲州屋の家へは足踏をさせぬと云い切つて引取つたのやないか、それじゃのに、又此処へ糸之助が忍んで来て、お嬢様を誘い出すような事になったのは、大方鳶頭も内々知つて居るのではないか、糸之助と共謀になつてお嬢様を誘い出し、金額を半分ぐらい取つたのではないかアと思われども是非がないやないか」

云うと怒つたの怒らないの、もと正直な人だから、額へ青筋を出して、

鳶「何を吐しやアがるんでえ、撲り付けるぞ、コレ頭を禿らかしやアがつて馬鹿も休み休み云え、糸どんが人を殺して金を取る様な人か人でねえか大概解りそうなもんだ、手前の心に識別ウするから其様事を吐すんだ、己が半分取つたたア何だ、撲り付けるぞ」

番「打たいでも宜え、私は理の当然をいうのや、お嬢様を殺して金子を取ったという訳じゃないが、然う思われても是非がないと云うのや」

鳶「何が是非がないんだ、撲倒すぞ」

清「まあ、少し待つておくれ」

と云いながら台所より出て来たは清助というお飯炊。

清「鳶頭まあ、貴方は正直な方だから、こんな事を云われたら、嗚はア胆が焦れて堪るめえが、己が一通りいわねばなんねえ事があるだアから、少し待つたが宜え——コレ番頭さん、此処へ出ろ」

番「何じゃ、汝が出る幕じやアない、汝は飯炊だから台所に引込んで、飯の焦ぬように気を付けて居れ、此様な事に口出しをせぬでも宜いわ」

清「成程己は僅なお給金を戴いて飯炊をしてえるからツて、飯せえ焦がさねえようにしていれば宜えというもんじやアあんめえ、当家へ泥坊が這入つてお内儀様を斬殺しても、己が飯炊だからつて、何にも構わずに竈の前にぶつ坐つて、宜えと思わしやるか、汝が曲つた心に識別するから然ういう間違つた事をいうだ、コレよく考えて見ろよ、汝は糸どんを憎むから、少しのことを廉に取つて糸どんが嬢様を殺したなんてえが、何処までも

汝がそんな事を頑張つて殺したといわば、己おらア合がってん点しねえだ、糸どんが庭へ来てお嬢様と相談して、明日あしたの晩連れて逃げようてえ約束をしたのを見たと言わば、何故早く其の事をお内儀様へ知らせねえだ、糸どんがコソ／＼でお嬢様を誘い出しに来やしたから、油断をしねえが宜ようがすとちよつと知らせればそれで宜ええだ、然うすれば直すぐにお嬢様を他家わきへ預けるとか、左さもなければお内儀様が氣きイ附けて奉公人も皆起きて居おらば、何うしたつて嬢様が逃げ出す氣きづ遣けえはねえだ、逃げなけりやア殺されることもねえだ、それを知つて居ながら黙つて、嬢様が逃出してから殺され、ば、汝が殺したも同じ事ことだぞ、まだぐず／＼何か云やアがると打ぶつ殺して己おれも死しんじまうだ」

内儀「コレ／＼清助静かにしないか、番頭ばんとう様に向つてそんな事をいつては濟まないじゃないか、鳶頭とび、お前まへも嘸腹さぞが立つたろうが、何卒どうぞ我慢をしておくれ、悉みんな皆私が吞込んでいから、私は決して糸之助の仕業しわざとは思わなけれども、大方糸之助も此の事を知らずに谷中に居るに違ちがひない、お前が行つて斯こう／＼と知らせたら、糸之助も定めて恟びつりするだろうと思うから、お願いだが、お前まへちよいと此の事を糸之助へ知らせてお呉くれでないか」

鳶「え、往いきますとも、半分取つたろうなんて、飛んでもねえ濡衣ぬれぎぬを着せられたんですもの、直すに行つて来ます、少し提ちようちん灯をお貸しなすつて」

ずうつと腹立紛はらたちまぎれに飛びだして谷中の長安寺へやって来ました。

鳶「え、御免なせえ、御免なせえ」

糸「はい……おやく／＼鳶頭」

鳶「や、糸どん……まア宜よかった、はあ……お前めえに怪しい事があれば何所どっかへ逃げちまうんだが、ちゃんと此処こゝに居てくれたんでまア宜よかった、あゝ有ありがて難がてえ」

糸「あの兄あにさん、何だか鳥越の鳶頭とんづこがおいでなさいましたよ」

玄「いやア、鳶頭、まあ何卒どつぞ此方こゝろへ誠まことに何どうも御無沙汰ごむさたをして済まぬ、ちよつとお礼れいかた／＼お訪ね申まうさんければならぬのじゃが、何分なにぶんにも寺用じように取紛とれて存ぞんじながら大きに御無沙汰を……」

鳶「そう長つたらしく云つてられちやア困る、大騒動が出来たんだ、まア御挨拶ごあいさつは後あとにしておくんなせえ、おゝ糸どん、お嬢様おぢやうさまが昨夜ゆうべ家出けだでをした事を知しってるかい」

糸「いゝえ…………」

鳶「いゝえつて震えたぜ、え、おい、お嬢様おぢやうさまが殺されちまつたんだよ」

糸「えつ、お嬢様おぢやうさまが……」

鳶「死骸しがいが弁天の池から今朝上けさあがつて、御検視ごけんしを願ねがうの何なんのつて大騒おほさわぎをしたんだ」

糸「へえー……じゃア千駄木の植木屋の九兵衛さんというのは何です、全体まア何ういう理由わけなんです」

鳶「何ういう理由の何のつて、大変な騒ぎなんで、まア和尚様さんお聴きになつて下せえまし、お嬢様は糸どんに逢いてえ一心から、莫ばく大の金子かねを持もつて家出をしたから、大方泥坊に躡つけられて途中で遣やるの遣らねえのといつたもんだから、殺されたに違ちがえねえんで、それを店の番頭野郎がこう吐ぬすんだ、何なんでも糸どんがお嬢様を誘い出して、途中で殺して金子を取つたに違えねえ、鳶頭も糸どんと共謀ぐもになつて、其の金を二十五両ぐらい取つたらう、こう吐すんだ、私わは腹が立つて堪らねえから、余程よつほど殴りつけてやろうとは思つたけれども、お前めさん何うもね、お内儀様かみさんが御愁傷の中だから、そんな乱暴狼籍の真似をしちやア済まねえと思つて、耐こえていたが、糸どんが何なんにも知らずに斯こうやつてゐるから本当に宜かつた、何卒どうぞ直に行つておくんせえ」

玄「いや、それは重々御道理ごもつともな訳じや、此方こちらにも不行跡ふしだらがある事ことちやから然そう云う御疑念ごぎねんが懸つても仕方がない、仕方がないが、然さう云う場合になると、糸之助いとすけは頓とんと口の利けぬ奴じやで、私わも一緒に参りましょう」

鳶「そりやア有難ありがてえ、なるだけ大勢の方がよすがす、じゃア直す直ぐに行つておくんせえ」

これから提灯を点けて寺を出かけ、三人揃って甲州屋の裏口から這入って来ました。

内儀「さア、何卒此方へ、くく」

鳶「え、お内儀様、谷中の長安寺の和尚様も入らっしゃいましたよ」

内儀「おやくくそれは何うもまア何うぞ此方へ」

玄「はい、御免を……唯今鳶頭から不慮の事を承りまして、何とも御愁傷の段察し入ります
ます」

鳶「まア、其様な長つたらしい悔は後にしておくんなせえ、さ、糸どん此方へ這入んな
よ」

糸「へエ……え、お内儀様お嬢様が飛んだ事にお成りあそばしまして、嘸御愁傷でござ
りましょう」

是迄は涙一滴滂さぬでいたが、今しも糸之助の顔を見ると、堪えかねて袖を顔へ押宛
て、わつとばかりにそれへ泣倒れました。

内儀「糸や、何うも飛んだ事になりましたよ、私はね、くれ／＼もそう云っていたの
だよ、決して出ちやアならない、今に私が宜いようにするから、お前心配おしでないよと
いって置くのに、親の言葉に背いて家出をしたものだから、忽ち親の罰があたって、あ、

いう訳になつたんだから、私はもう皆みんなこれまでの約束ごとと諦めていたが、お前の顔を見たら何うにも我慢が出来なくなつて声を出しましたが、もとくお前の為に家出をしてこんな死しによう様をしたのだからお前何卒どうぞお線香の一本も上げて回向をしてやつておくれ」

糸「へエ、何とも申そう様はごさいませぬ、誠に何うも重々わたくし私が悪いのでごさいます」
内儀「いゝえ、お前ばかりが悪い訳じゃアないよ」

鳶「おゝ番頭様さんちよいと此処こゝへ来ねえ」

番「あい、何じや」

鳶「おゝ糸どんはちやんと此処こゝにいるよ、え、おう、人を殺して金を取つたような訳なら、パイと何処どこかへ逃げちまわア、己が寺へ知らせに行くまであつけらけんと居られるか、さ、何うだ、これでもまだ手前てめえは己うたぐを疑つてやアがるか」

番「まアあんたは、糸之助を鼻尻はなぢにしておるで、そう思いなはるのじや、これ糸之助ちよつと此処これへ来い、汝おのれはまだ年は十九で、虫も殺さぬような顔附やツをして居るが太い奴やつちや、体ていよくお嬢様を誘い出して、不忍弁天の池の縁ふちの淋しい処でお嬢様を殺して、金を取つて、死骸しかいを池の中へ投ほうり込んだに違いあるまい、さ、どうだ、真直まっすぐに云うてしまえ」

斯こう云われるともと人が善よいから、余あんまり腹が立つて口が利かれない、いきなり立つて番

頭の胸倉へ武者振りつこうとする途端に、ポンと墮ちたのは九兵衛が置忘れて帰った女みよう夫巾とぎんちやく著、番頭は早くも之これを拾い取って高く差上げ、

番「こ、是じゃ、お内儀いゑはん、是はお嬢様さんが不断持つて居やりました巾着きんちやくでがしよう」
云いながら振ると、中からドサリと落ちた塊かたまりは五十両ではなくて八十両。

三

え、引続いてお聴きに入れまする、お梅糸之助は互に若い身そらで心得違をいたしたるより、其の身の大難かたを醸かもしました。扱さて彼の梅には四徳を具すというが然そうかも知れませぬ、若木を好まんで老木おいきの方を好む、又梅の成熟するを貞ていたり、とか申して女子おなごの節操みさおあるを貞女ていじよというも同じ意味で、春は花咲き、夏は実を結び、秋は木の葉こが落ちて枯木このようになつたかと思うと、又自然に芽が出て来るは、誠に妙なものでございまして、人も天然自然に此の物を見る、あゝ好よい景色だとか、綺麗きれいな色だとか、五色ごしきばかりではなく木の葉きの黄きばんだのも面白く、又染しみだらけになつたのも面白い、これは唯其の人の好みによつて色々になるのでございます。「心をぞわりなきものと思ひぬる見る物からや恋しかるべき」

で見る物も恋しく、心と云うものは別に形は無いが、善を見れば善に感じ、悪に出逢えば悪に染まる、されば己おのれの好む所の境きょうがい界がいが悪いと其の身を果はたすような事もあるのでございます。

糸之助は奉公中主人の娘お梅に想われたのが、因果はしまの始りはじまでござりまして、自分も濟まない事と観念を致したから、兄玄道の側へ参り、小さくなつて、温順おとなしく時節到来を待つて居ました、所へ千駄木の植木屋九兵衛というものが参り、

九「昨晚お嬢様さんがお出いでになりましたから、私わたくしが何処どこへでもお逃し申すようにするゆえ、金子かねの才覚をして来い」

と云うので、態わざとお梅の巾着の中に三両ばかり入れた儘置いて歸つた。是が九兵衛たくの企みのある処でござります。此方こちらはまだ年が若いから、何の気も附かず、是は全くお梅から届けたものと心得て、前後あとさきの思慮も浅く、其の巾着の内へ、本堂再建さいこんの普請金八十両というものを盗み出して押込み、これを懐へ入れて置いたのが、立上る機勢はずみにドサリと落ちたから番頭はこゝぞと思つて右の巾着を主婦あるじの前へ突付けたり、鳶頭かしらにも見せたりして居丈高いたけだかになり、

番「さ、糸之助、此の巾着が出る上は貴様がお嬢様さんを殺したに相違あるまい」

と責めつけたから、座中の人々互に顔と顔を見合せ、鳶頭も甲州屋の家内も実に驚いて、「よもや糸之助がお梅を殺して五十両という金子を取りはすまい」とは思うが、金子が出た。見ると五十両ではなくして八十両の包み金、表書には「本堂再建普請金、世話人萬屋源兵衛預る」と書いてあったから、誰より驚いたのは玄道和尚で、ぶる／＼震えながら、

玄「ま、これ糸之助、ま、此の金子は何うした」

糸「はい／＼申し訳がございませぬ」

玄「これはまア……番頭さん、鳶頭、又御当家の御家内様まで、糸之助がお嬢様を殺して金子を取ったろうという御疑念をお掛けなさるは御道理の次第でござる、なれども、此の儀に就いては私より少々糸之助へ申聞きたい事がござれど、少しく他聞を憚りまする故、何所か離れたお居間はござりますまいか、余り人様のお出のない所を拝借いたしましたもので」

内儀「はい／＼、あの鳶頭、奥の六畳へ連れて行ったらよかろう、離れて、彼所が一番静でもあり人が行かないから」

鳶「宜いかね、大丈夫かえ和尚様」

玄「いえ、決して逃しは致しませぬから、御安心なすつて……さア来い」

と糸之助の手を執つて引立てる。糸之助は和尚の従者で来たのだから今日は*耳こじりを差して居る、兄玄道に引立てられ、抛なく奥の離座敷へ来るといきなり肩を突かれたからパツタリ畳の処へ伏しました。玄道和尚は開き直つて、

*「みじかいわきざし」

玄「これ糸、手前はまア呆れ返つた奴じや、これ手前はな、御両親が相果てからと云うものは、私の手許に置いて丹精をしてやったのじやないか……女子の手もない寺へ引取り、十一の歳から私が丹精をして、読書から行儀作法に至るまで一通りは仕込んでやつたが、何をいうにも借財だらけの寺へ住職をしたのが過りで、なか／＼然う何時までも手前一人に貢いでやる訳にも往かぬから、不自由を堪えて御当家へ願ひ、住みこませると、長の歳月御丹精を戴いた御主人様の大恩を忘れ、奉公人の身の上でありながら、御主人様の令嬢と不義いたずらをするとは、何と云う心得違の事じや、それで手前は武士の胤と云われるか、私も手前も、土井大炊頭の家来早川三左衛門の胤じやないかい、私は子供の時分は清之進と云うたが、どの人相見に観せても、剣難の相があると云うたに依つて九歳の折に出家を遂げ、谷中南泉寺の弟子になつて玄道、剃髪をしてから、もう長

い間の事じや、其の後嘉永の始に各藩にて種々の議論が起り、えろうやかましい世の中になつた、其の折父早川三左衛門殿には正義を主張して、それはいかぬ、然ういう道理は無いと云うて殿へ御諫言を申上げたる処、重役の為に憎まれて遂には追放仰付けられた、お父様にはそれを口惜しゆう思召てか、邸を出てから切腹をして相果られた、続いて母様もお逝去になる時の御遺言に、お前の弟衆之助はまだ頑是もない小児、外に頼る者もないに依つて何卒お前、丹精をして成人させて呉れとのお頼み、そこで私が寺へ引取つて、十一から三ケ年も貴様の面倒を見てやつたが、今もいう通り何分不如意じやに依つて御当家へ願うたのも、然ういう柔弱な身体じやから、商人に仕ようと思つた私の心、尽も水の泡となり、そのみならず誠に愧入つたのは此の八十兩の金子じや、知つての通りの貧乏寺じやが幸いにも檀家の者にも用いられ、本堂が大破に及んだ、再建をせにやなるまい、私が世話人に成つてやる奮発せいと、萬屋も心配をして呉れて、これ見ろ、まア是だけの金子を集めて、是を資本に追々と再建に取掛るつもりでわぎ／＼源兵衛さんが一昨日持つて来たに依つて、直手前に仕舞つて置けと云うて渡した其の金子を手前が盗出して此所へ持つて来るとは何ういう了簡じや、此金がなければ片時も己はあの寺に居られぬという事も、手前能う知つて居るじやないか、憎い奴じや、同じ早川の家に

生れても、私は総領の身の上でありながら出家となり、又手前の兄三次郎と云う者は、何ういう因縁か、十一二歳の頃からして盗心があつて、一寸重役の家へ遊びに行つても、銀の煙管じやとか、紙入じやとか、風呂敷とか、手拭とか云うものを盗んで袂へ入れて来るじや、そこでお父様も呆れてしまい、此奴が跡目相続をすべき奴じやけれども仕方がないと云うて、十九の時に勘当をされた、丁度三人の同胞でありながら、私は出家になり、弟は泥坊根性があり、手前は又主家の娘と不義をして暇を出されるのみならず、兄の身に取つては大切の金子まで取るといふ奴じやから、何う人さんから云われても一言の申訳はあるまい、憎い奴じや、兄の自滅をするといふ事を悉く知つて居ながら、斯ういう不都合をするとは云おう様ない人非人め」

と腹立紛れに糸之助の領上を取つて引倒して実の弟を思ふあまりの強意見、涙道に涙を浮べ、身を震わせながら糸之助を畳へこすり附ける。糸之助は身の言分が立ちませぬから、

糸「申訳を致します……もも申訳を……何卒お放しなすつて下さいまし」

玄「さ、何う言分をする」

糸「へい申訳は此の通りでござります」

と自分の差して来た小短い脇差を取って抜くより早く喉へ突立てにかゝった。玄道は胆を潰して其の手を抑え、

玄「こ、これ待てッ」

糸「いゝえ、お留め下さるな、申訳が有りませぬから、私は自害をいたして申訳をいたします」

玄「自害をしたつてそれで済むと思うか」

頻りに争うておる処へ、ガラリと縁側の障子を開けて這入つて来た男を見ると、紋羽の綿頭巾を鼻被にして、結城の藍微塵に単衣を重ねて着まして、盲縞の腹掛という扮装、小意気な装でずつと這入つて、

男「ま、ま、お待ちなせえ、おう詰らねえ事をするない、手前は死なねえでも宜いや」
糸「へエー」

と顔を見ると今日朝の中に来た、千駄木の植木屋の九兵衛だから恟りして、

糸「おや、貴方は千駄木の植木屋さんで……」

九「ウム、植木屋の九兵衛だ、お前はまア死なねえでも宜い……え、和尚さん私は、千駄木の植木屋の九兵衛と云つて、此の糸之助を騙しに行った悪党でござえます」

玄「何じや……悪党とは」

九「へエ誠に面目次第もござえませぬ、お前さんの為には現在の弟でありながら、十九の時に邸を出て了いやした、それゆえ糸の顔を知らねえもんだから騙しに行つたんです、兄さん大層まア年が寄つて、お顔を見忘れちましたよ」

玄「なに誰じや」

九「誰でもねえ、お前さんの弟の三次郎です」

玄「おゝ、弟の三次郎、成程然う云えば、何所か見覚えのある顔だ、それが何うして此所へ出て来た」

九「まア聞いてくたせえ、私が上野の三橋側の夜明しの茶飯屋のところ、立派な身形の新造が谷中長安寺への道を聞いてるんで、てつきり駈落ものと睨んで横合から飛び出し、私もね、お前さんが其の長安寺の和尚さんとも知らず、糸之助が私の弟ということも知らねえもんだから、旨い金蔓に有附いたと実ア其の娘を駆して引張出し、穴の稲荷の脇で娘を殺し、巾着ぐるみ有金を引濞い、死骸は弁天の池ン中へ投げ込んだのは私の仕業だ、そればかりでなく、娘を殺す前に、段々様子を聞くと、宅に奉公をして居た糸之助と云う者は、暇が出て当時では谷中仲門前の長安寺と云う寺に居るんだと聞いたから、もう

一仕事しようと思つて糸の処へ出かけ、旨く騙して金子を持って逃げておいでなさいと云つたのは、私の入智慧、本堂再建の普請金八十両を盗ませたのも皆この三次郎の作略でござえます」

玄「ふむ、此奴……えらい奴じやな」

三「でね、まあ然ういう理由なんだから、鳶頭と番頭や何か残らず此所へ呼んでおくん
なせえ」

玄「糸、早う呼んで来い」

糸「誰方も早く来て下さいませよ」

と呶鳴つたから、何事かと思つて鳶頭も番頭も皆揃つて来ました、ずらりと大勢ならべて置いて、右の一伍一什を三次郎が話した時には、鳶頭も番頭も驚いて暫くは口も利けぬくらいでありました。

三「さ、何うぞ私に繩を掛けて引く処へ引いてお呉んなせえ、決して糸之助の科じやアねえ、私が人殺をしたんですから……其の代りどうか兄さん糸を可愛がつてやつてお呉んなさい、又糸も宜いか、もう四十を越してる兄さんだ、能く大事にして上げてくれ、よ、お前幾歳になる、なに十九歳だ、うむ然うか、いや鳶頭、誠に何とも云いようがござ

えませぬ、お前めえさんは糸を鼻屑はなづかにしてお呉くんなすつて、やれこれ云つて下すつたのは、私わっちからも厚くお礼を申します、実ア今日此処こゝへ忍び込んで間まが好よかつたら、此のどさくさ紛れに、もう一仕事する積つもりで来た処とが、まア斯こういう訳になりましたから何卒私どうぞへ縄を掛けて突出してお呉くんなせえ……やい番頭、さ、己を縛れ」

番「なに此奴こいつ……汝おのれが泥坊か、此のお庭へ何所どこから這入つた」

三「何所からだつて這入へいるが、さ縛れ、其の代り己が喰くらい込めば、もう娑婆ア見る事ア出来ねえから、此の番頭手前てめえも一緒に抱かいて行くから然そう思ええ」

番「そりやアえらい事ことぢやな」

是これから捨て置おきませぬから、甲州屋の家内うちは家うちから縄なわつき付つきを出すのも厭いとだと心配しんぱいをして果はしが無い。そこで三次郎が到頭自訴ごうじゆいたして、何うしても斬首ざんしゆの刑けいに行いわるべきであつたのが、何ういう事か三宅へ遠島を仰おおせつ付つけられましたが、大層改かいしゆん悛けんの効あちが頭あわられ、後お赦のちしやになつて、此の三次郎は兄玄道の徒弟しゆぎようとなり、修しゆ行ぎようの功こうを積たんで長安寺あいらの後住ごじゆうを勤まめました。此の者は穴釣あなづり三次と云つて、其の頃下谷では名高い泥坊でござりました。又糸之助は遂に甲州屋へ貰もらわれまして、甲州屋の跡目を相続あひつぎいたし、其の後浅草のち仲町の富田屋ふるぎやという古着商ふるぎやから嫁を貰もらいましたが、此の嫁も誠に心懸こころけの良よい婦人ふじんでござ

りまして、母に孝行を尽したという末お目出度いお話でござります。

青空文庫情報

底本：「定本 圓朝全集 卷の一」近代文芸・資料復刻叢書、世界文庫

1963（昭和38）年6月10日発行

底本の親本：「圓朝全集卷の一」春陽堂

1926（大正15）年9月3日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

ただし、話芸の速記を元にした底本の特徴を残すために、繰り返し記号はそのまま用いました。

また、総ルビの底本から、振り仮名の一部を省きました。

底本中ではばらばらに用いられている、「其の」と「其」、「此の」と「此」は、それぞれ「其の」と「此の」に統一しました。

また、底本中では改行されていませんが、会話文の前後で段落をあらため、会話文の終わりを示す句読点は、受けのかぎ括弧にかえました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

※「巾著」と「巾着」の混在は、底本通りです。

※「*」は注釈記号です。その内容は底本では上部欄外に書かれています。

※表題は底本では、「闇夜《やみよ》の梅《うめ》」となっています。

入力：小林 繁雄

校正：かとうかおり

2000年5月10日公開

2016年4月21日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

闇夜の梅

三遊亭圓朝

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 鈴木行三校訂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>